

沖縄基地問題に関する理事会声明 2012

日本は、近世以降、繰り返し沖縄の人々の思いを無視して沖縄を支配、利用してきました。

明治政府が琉球王国を強制的に近代日本国家体制に組み込んだ最初の「琉球処分」(1879年)に始まり、戦後の昭和天皇の「沖縄メッセージ」と対日講和条約発効によるアメリカ軍統治の正当化(1952年)、さらに米軍基地を維持したままの日本への再統合としての「本土復帰」(1972年)と、日本は自らに都合の良い「琉球処分」を繰り返し、沖縄の人々はこうした日本を「ヤマト」(「本土」と呼んできました。

「本土復帰」から40年を経た今年もまた、米兵2人による女性暴行事件が起きました。沖縄の人々の反対の声を無視して、これまで何度も墜落事故を起こしている軍用ヘリ・オスプレイの配備も強行されました。酔って家に侵入してきた米兵に少年が殴られる事件も起きました。これ以外にも「本土」では報道されていない事件が繰り返されています。

米兵による犯罪被害とそれに伴う恐怖も、基地に土地を奪われることによる経済的な損失も、「基地依存」も、日々の騒音被害も、米軍用機の墜落事故の恐怖も、中東をはじめ世界各地で人々の上に爆弾を落とし続ける米軍の出撃地となっていることも、沖縄自らが引き受けたものではありません。日本が日米安全保障条約の下で沖縄に押し付けているものです。沖縄に痛みを負わせ、傷を負わせ、さらにはそれに関する受忍を強いているのは他ならない日本です。

私たち日本バプテスト連盟は、さらに、こうした沖縄の痛み苦しみを理解することなく、アメリカ占領下の沖縄を「国外」と規定して宣教師を派遣した歴史を有しています。日本がやってきたことを、そのままなぞるようにして、私たちも沖縄に痛みを負わせていることについて無自覚でした。(「沖縄『国外』伝道に関する総括(1998年)」)

日本バプテスト連盟の業として行われた那覇新都心キリスト伝道所の開設(2001年)は、私たちの悔い改めの証であり、沖縄の痛みを自らの課題として歩むという決意の証でした。この歩みをさらに連盟全体の動きとして進めることが、私たちの使命です。

基地といのち、軍隊と人権は共存できません。今、私たちは基地を負わされてきた沖縄の呻き、叫びに耳を傾け、苦しみの只中であって平和を祈り求めている沖縄との出会いを深め、祈りを合わせたいと願います。私たちは、沖縄の痛みに対する無知や無関心から脱出し、私たち自身の課題として沖縄を覚えていきます。日本バプテスト連盟理事会は、沖縄が日本に踏みにじられ続ける痛みから、そして日本が、沖縄を傷つけ続けることから、それぞれに解き放たれて、主イエスの和解の福音が指し示す真の平和が実現するその日の到来を信じ、祈り求め、行動します。

主イエスよ、先立ちたまえ。伴いたまえ。我らを新たにしたまえ。聖霊なる神よ、我らをきよめ、平和の器となさせたまえ。父なる神よ、御国を来たらせたまえ。

アアメン、主イエスよ、来たりませ。平和の主イエスよ、来たりませ。

(日本バプテスト連盟「平和に関する信仰的宣言」結語より)

日本バプテスト連盟理事会

2012年11月7日